川柳句集

# わすれす

川柳句集

# ねっくれす

西出一栄

68歳　誕生日を迎えて

女なるかや猪首にかくび飾り

一栄

胡瓜と茄子どっさり漬けて心満つ

一栄

# 自　序

故清水白柳先生の手ほどきをうけましたのが昭和二十九年三月頃と記憶しております。それから間もなく同年八月十四日放送の大阪中央放送局川柳選評課題「ネオン」の選者が清水白柳子（当時）でした。私は無鉄砲に投句しましたところ佳作十五句の中に、

道問えばネオン目標に教えられ　が、

抜けていました。それから川柳が面白くなったのかも知れません。と、しますと、柳歴十八年になりますが、すこしも句は上達していません。

河南高校（当時河南高等女学校）を卒業しただけの学歴では無理もないと自分で自分を慰めているのですけれど、碁や将棋のように

段がないからついて行けたものと思います。

ライバルの前進素晴らしいものに見え

幾度か川柳を断念しょうかと思いながら、知らず知らずのうちにペンを持っている自分が不思議でなりませんでした。

ドラマのような大恋愛も失恋もなく、平々凡々のネジ製作所零細企業の主婦で老けてしまいました。殊にここ三、四年来心臓肥大のため入退院を繰り返えしています。名誉職も返上して養生を致して居りますが、好きだった日本舞踊も踊れなくなりました。唄は音痴でうたえません。

何かコツコツと書くか本を読むより仕方のない体になってしまいました。あまつさえ難聴と来ていますので外出することも次第に遠

ざかり、視野の狭まい境地になってしまい、したがって作句するにも身近かなものばかりしか捕えることが出来ません。達磨のように坐っている私には、よくぞ川柳の道に這入っておいてよかったと、今更しみじみ白柳師に感謝を繰り返えすのみでございます。

師の教え胸の底から拾いあげ

今年の四月頃ふと長男と漫才のような言葉のやりとりを致しました

「お母さん句をまとめておきなはれ本にしてあげまっさかいにな」

「何を言うてんのお母さんの句は本にして人様に見て貰うような句はあらへん。暇つぶしに書いているだけやさかいに」

「上手下手を言うてるのやおまへん、八人の孫におばあさんのイメージを残したいんです。とにかくノート出しなはれ」と、筋切れ

たノートから長男夫婦で句箋に写し書きして呉れたのが二千四百句余まり。自選してみましたが何れも同じように見えて一句もよい句が見つかりません。そこで金井文秋先生に選句をお願い致しましたそして先生のご承諾を得て、麻生葭乃女史にもご相談申し上げて四百数十句、このあと全面的に何から何まで文秋先生が一役買って下さいまして刊行に移して戴く運びとなりました。

題字は中川滋雀先生の筆、不二田一三夫先生の陰のお力添えもあり、今日ここに自分の句集を手にすることが出来ました。これひとえに諸先生方のご尽力のたまものと感謝する次第でございます。

句集手にこころ豊かな誕生日　　一栄

# 目　次


自　序　西出一栄
首飾り……七
箱入婆……三一
心満つ……四九
傘の柄……七七
呉服屋……一〇五
月花虫……一三七
両隣り……一五五

# 首飾り

女なるかや猪首にも首飾り

麦わらに差した首にも美女を選り

美人になりたいドライヤーの熱に耐え

こよみから自分の齢を確かめる

仮縫いへ時間がかかる肥満型

体重が足の負担へ気兼ねする

初恋のイメージ相手は若いまま

三人の子持ちでピンクまだ似合い

若き日の嫉妬　さめざめ泣いただけ

包装さして女心のまだ迷い

迷います標識のない人の道

不足ない年でこの柄地味やろか

衿拭いて春のおとずれ待ちわびる

お辞儀して足袋の汚れが気にかかり

いつまでも着る気の柄を地味にする

蛍光燈わたしの好きな色に見せ

へそくりでうっかり夫のものを買い

ゆかた着て女らしさを取りもどし

結局はほかす空箱しまっとき

かげろうに似たよろめきも出来ぬまま

耳うちをまま子にされて気がわるし

いざシャッター　やっぱり固い顔になり

混浴へタオル一本たよりにし

デザインはお任せします肥満型

体重を貫目に直しギョッとする

新米のカメラへ衿をかき合わせ

針に糸通らぬ齢で妬いており

入念に踵をこする老いの風呂

来客にまみえる祖母の身だしなみ

お値段の手頃な品は気に召さず

着物々々と灰になるまで女なる

柿　みかん　せめて余生の贅に積み

口止めをしてまで云うた愚痴を悔い

母としてマダム　素顔の参観日

別荘の茶会へ競う一張羅

未亡人心の鍵はあけさせず

活け花の根締めのように女生き

人生の余白へ残すものが欲し

家政婦の独裁主義をもてあます

付添いと波長の合わぬ佗しさよ

病院呆けうたを忘れたカナリヤか

石段へ痩せやせやせと蟬しぐれ

虫の声今年も聞ける闘病記

付添いが先生の云いつけ守りすぎ

闘病へかげろうもゆる窓を明け

藤・ひらど通院の眼をよろこばせ

餅シーズン又体重がふえるがな

へそくったままで使わず女老け

家風に合わぬと人の育てた娘に文句

老妻も湧湯の湯気にゆのしされ

コマーシャルのように聞いとく老いの愚痴

チト痩せて指輪クルクルもてあそび

食欲が出てきて垢を気にしだし

デパートから贈って義理を済ませた気

猫化けへうちの猫まで恐くなり

ぼやいてぼやいて姑すっとしたらしい

老いのひがみ勝手に四面楚歌にする

短冊に乗ってるがなとおだてられ

墓地と宝石買うてふと自嘲する

トラブルに巻き込まれとうない席を立ち

身の上を聞いてそれから酔わぬ酒

自尊心非力を運にかこつける

爪型を入れてかぼちゃを買うてくる

お手伝いの気ままへ唇噛んでおく

飛躍するすべを忘れた兎に似

清水白柳先生逝く

師なきあと心貧しき日がつづく

# 箱入婆

主治医と家族で箱入婆にされ

添わしても根締めの花はあっち向き

釘ぐらい打てよと夫　打ってくれ

赤い羽根一本買うて気が軽し

忘却があり金婚にたどりつく

雀むらがる　核家族など知らぬげに

あきらめて二号に介抱させてやり

ライバルと妥協した日のよく眠れ

仲よしに答案見えるように書き

どたん場で妻にあかした行詰まり

嫁がせて母より父が淋しがり

社の不満妻は酌ぎつつ聞いてくれ

おめでたへ一つ覚えの白扇か

嫁のセンスおしゃれな姑にしてくれる

ベッドへは打診と違う嘘を云い

臨月へパトカーのことも云うておき

配達にせめてむぎ茶を入れてやり

厄介なことに年子になりそうな

当座だけ座敷片付く棚を吊り

口ごたえされてこいつはたのもしい

いつもなら叱るキャンデーママも食べ

人形へ母そっくりの話しぶり

水入らず勝手な時だけ母呼ばれ

園児より親が必死の栗拾い

子らの眼にエプロンの母　母らしく

姑に甘えてかかる手もおぼえ

肩の荷を降ろしてくれた晴れ姿

設計図畳の部屋も欲しい母

しぼり手と拭き手に分けた大掃除

顔見せただけでよろこぶベッドの眼

割り切れぬ性質に生まれて損ばかり

一徹の亥年に歩巾合わして来

倦怠期退屈のお茶ほろにがし

夫婦げんか犬も喰わぬは若いうち

つきあいも仕事のうちにして多忙

表札の養子の名前に馴染んでき

終りまで聞かず任しとけまかしとけ

その恋をあきらめさすも友として

真ん中に坐わり相槌いそがしく

いざこざがペットの餌をやり忘れ

旅楽し大阪弁が横に居て

往診の主治医のあとを追う夫

渡された肩書を見て主人呼ぶ

着ぶくれて文楽人形思わせる

最後まで残る味方は妻一人

空白へ母は二伸で書き添える

カーテンのレールも春のリズミカル

嬉しい夜　星もウインクしてくれる

心満つ

胡瓜　茄子　どっさり漬けて心満つ

女手の要る商売で嫁をせき

寄付帖のトップ　面あてしたつもり

さいそくのしにくい立替え忘れられ

人間味静かにお茶をすする時

始めから親子の夢は違うてた

持ち越しがあるのに流行追うてくる

不養生あとの始末は医者まかせ

お家芸頭のよわい子につがせ

キャンプして獲物玉虫かぶと虫

月の出を待つ間をトラになりかかり

倦怠期拗ねた昔は若かった

五つ紋着て洋食の卓につき

風雪に耐えて少しは角がとれ

あれやがな　なまえなかなか口に出ず

ぬるま湯のような意見が身に応え

トラの子をしっかり抱いて病みつづけ

明け方に風邪ひかされた夏毛布

万博の入場券へ日を数え

藍綬褒章へ内助の妻の輝く日

へそくりの満期の通知留守にくる

一票へこんな首でも会釈され

図書館で読んで本買う金送れ

スイッチを切って廻って今日を寝る

雑布も癇性病みにはよく疲れ

いまいまし待つ身へ犬がほえてくる

ふだん着のままで上座が板につき

順番を待って福引きあいそなし

後学の為と競馬で敗けてくる

やけくそになっても使う金はなし

雨止んで屋根の修繕又忘れ

地図見せて運ちゃんここへたのみます

心斉橋夢のつづきを見に出掛け

留守頼む隣りに今日は先越され

うたと世のリズムに遠く貝でよし

天と地がくっつきそうに気がつまる

腹案のつぼへなかなか落ちて来ず

口出して損したたとえ教えとき

小刻みと思うた月賦あなどれず

心気一転さらのネクタイしめただけ

うかつにも才女夫をよろめかし

スモッグに挑戦をする鼻毛のび

子ら巣立ち親の期待に遠くいる

市場へは女中を乗せて妻出かけ

面あてに飲んで帰れば妻は留守

呼びりんの故障と知らず留守かいな

宿の下駄ゆるい鼻緒のまま出掛け

総理大臣へ直訴をしたい台所

乳母車だらだら坂をそり返えり

屋上があって月見の酒が要り

休日は忘れず国旗出し忘れ

足元のニュース遠くで聞いて来る

更衣室シャツが汚れていたひけ目

おそろいで来やはったスピッツまで連れて

くぐり戸の鍵はかけない当てがあり

すぐ寝つく性なり善人かも知れず

日当りへ腰を下ろした乳母車

下戸同士申し合わせて席をとり

玉串へ敷かれますとは云わなんだ

えらい邪魔したなと押売り凄むなり

云いたい事明日に延ばしてまかれとく

狭き門今年も三振しそうなり

年忌には先祖の美徳だけ並べ

玄関でもう他所ゆきの顔になり

新婚へ母のへそくり吸いとられ

せわ好きが隣りのおかずもことずかり

親の意地子供の頭棚に上げ

序の口に唄えばみんな聞いてくれ

たまさかの温泉湯疲れして帰り

ふり出しに戻れぬ意地へ馬力かけ

又デイト手芸一向はかどらず

達者なうちに旅はしとけと嫁に言い

仲人の云うた通りに好きになり

ちょん髷に背広も混じるフイナーレ

あみだくじ云いだしべえがカモになり

ニックネームへ「ヨオー」と答える間柄

人間が人間の道行くむつかしさ

晦日そばこれが今年のフイナーレ

# 傘の柄

おんぶした子が傘の柄を持ちたがり

画用紙へキリンの首がチョン切られ

市場籠孫ひきずって持ちたがり

春や春うちの孫まで美女に見え

ひったくるように小づかい持って行き

迷い子になったをパパにだまっとく

孫のサービス二ツ三ツ肩叩くだけ

べんちゃらの云えない人に子はなつき

駄菓子屋で迷う子の手が宙に浮き

知恵づいて来る子の問いにママあわて

末っ子の気楽さ背丈ばかりのび

手のひらへ一足のせた孫の下駄

泥んこがおやつを取りに戻って来

子沢山出世しそうなのも混じり

おもちゃ屋を素通りさせぬ子に育て

来客へギョウザのように子はならび

孫が来て中途半端で本を閉じ

砂壁の孫には脆いものと知り

一日がこんなに長い孫の留守

おしっこも云えぬにすねるすべ覚え

掛軸へ孫のクレパスハラハラし

むかしむかしと孫が暗記をしてしまい

銭湯へ父と行く日はいやがらず

里の母あんじょう抱きぐせつけて去に

もう聞こえるのかなあとガラガラ振って見る

うちの子がニュースの中にいるニュース

始めから脱がせばよかった水遊び

知恵の箱孫にテストをされる羽目

つまみ食い背の子供も口をあき

風の子の群れに見つけたうちの孫

うたた寝の大きい方をパパ運び

末っ子も巣立ちざくろははぜたまま

大家族宛名へ分ける年賀状

へそくりをぼけんうちにとつつきに来

デイトの娘テストされたと戻って来

黙否権行使の妻をもて余まし

シクラメン赤を並べて嫁若し

やわらかな陽射しへおしめ解いてやり

嫁がせてあとの始末に気が疲れ

権利金引かれ孟母を真似られず

マイカーを賭けて入試を力ませる

寝返りへ母は根よく蒲団着せ

粥炊いて母は仮病へ気をつかい

半袖になって台所埒があき

初釜の湯気が嬉しい亭主の座

割烹着外せば母ちゃん外出か

思春期のおしゃれズボンの寝押しから

連休のプラン結局里帰り

勉強部屋スタンドだけが徹夜する

子に孫にソロソロやっとく生き形身

進学へ無口の父の眼がくぼみ

嫁してから母のしつけが解りかけ

秋深く読書する子へ羽織らせる

嫁が来て献立替わる台所

雨の日の客へ雑布出迎える

蛍篭蓋あけなやと持たされる

一年の埃はたいて元の棚

美容院へ晩の支度もして出かけ

電化してお出まし多き母となり

ホームバーママのワインも並べとき

血圧へ制限すれば外で酔い

荒々しく叱る父にもあった過去

ラーメンと缶詰置いて妻出掛け

染めかえて自分の柄にした形見

民謡の踊りみやげに母帰る

春うららひとり民謡口ずさむ

ウイスキーとチーズで済ます不意の客

もう一寸背丈がほしい棚のもの

ピアノ弾く家にも祖母の箏の爪

寝転んでボソボソ話す里帰えり

引き継ぎが無いままお手伝い嫁くという

もやもやを土産のように里帰り

咳払い一つして姑おりてくる

漫才のちぐはぐ肩のこりほぐし

妻の留守行商に買うてくさされる

錦秋の候にて今日も妻は留守

早計を妻の片眼で押さえられ

母老いて夜中のベルへハッとする

# 呉服屋

# 呉服屋の女心を知る年期

マンションの小鳥になってミンク着る

戎さん先きに繁盛してござる

裏門へ弱味の金を親は積み

乞食の子よそ見しいしい礼を云い

聞き馴れのよい会名で今日も留守

宿借りのように予備校にもぐり込み

交渉へ冷酒一ぱい干して行く

恵方の官主皮算用に忙しく

家伝の持ち味のれんのあるかぎり

二枚目花束楽屋にほっとかれ

迷信が道路の巨木まだ残し

回向にも特別があり高野山

取引へ野心があってクラブ振る

身の上を聞かんといてと女逃げ

銀行と芸者は金のあるあいだ

聖人故にエピソードとして書かれ

ソロバンを伏せて勉強しときまひょ

店則を社則に換える二世なり

役員になって会則読み直し

お言葉に甘えて行けば留守と云う

無理矢理に飲ませて旦那悦に入り

二重三重羊羹中で気がねする

貧乏神根よく落ち目へしがみつき

借金をしたことにして家を建て

世に拗ねた尼僧の肌のきれいすぎ

預金なら通す裏口あけてくれ

自由主義素直な髪に癖をつけ

蛇のようなヒモがついてる妓と知らず

中卒の鼻息職安まで荒し

メモ繰って遺憾乍らと断られ

待遇を云わず給料の額に触れ

女性上位酒も煙草も負けていず

エネルギーの余まりを捨てにボーリング

新社員派閥があってなやむ日々

ウインクで済む挨拶を感づかれ

永遠に幸多かれがもう別れ

片腕になるぜと喪服ささやかれ

泣くよりはましと音痴の唄を聞き

日清日露勝ったいくさにある墓石

役得も入れて書かした領収書

日溜りへ一人来二人来養老院

失礼の表現頭かいておき

オアシスを求めて孤独バーの隅

手不足へ廻転椅子の留守多く

オリンピックのおかげで浄化される街

審査員惜しいところとにごしとき

空巣から見ればまじないのような鍵

裏話銀行耳の早いこと

蛍狩ポスター程は飛んでいず

折込みに応えてくれるは特価だけ

民謡で県人会の幕があき

赤旗を振れとの学資送ってず

旅行けばタクシー　ガイドもしてくれる

アパートへ五点セットで行くつもり

免許証とらせば黙って他社へ行き

先生がストは斯くするものと見せ

二号の子パパの出張多い日々

モデル泰然自若として素肌なり

カーテンを引くだけ婦人科わるびれず

横車押すだけ押して寄付はせず

欠点だらけのように折れて嫁の親

お手伝いさんと改称しても来てくれず

門松も明治生まれのいるかぎり

うどん鉢両手ぬくめて割るお箸

若白髪これで気苦労してまんねん

役員の無口お茶だけ飲んで去に

スモッグを逃れたつもりへ工場建ち

貸し傘の十本いつか姿消し

チップまで割勘で行く女連れ

いつからか尾を振る部下へ目がかわり

やりよるわいと親父養子に任かしたり

専門に診せるとすぐに切開りたがり

アパートに住んであたしは元華族

落選の違反とことん洗われる

職変えて変えて行きつく釜が崎

教育ママ家業を継がぬ子に育て

お正月蒸発しとうなる本家

余裕見た筈の約手がもう期日

衣食足りフーテン族の仲間入り

尊敬をされてる証拠票に出る

鴨川の水を濁して染め上がり

妻と店一緒に積んで去ぬ夜店

中絶か産むか思案の共稼ぎ

スターの子親の足跡踏んでいた

タクシーの今度はお客やられたか

ああ　あの熱弁も二枚舌

角帽を被せたい家の子は出来ず

デザイナー型破ぶるのに一苦労

理髪師の切れ味頭の毛でためし

# 月花虫

月・花・虫・野仏うれし秋の夜

日当たりへ双葉の鉢の位置を変え

コンクリートのわれ目からもおらが春

隣から見れば枝ぶりよい桜

やっと出た双葉へ花の名を忘れ

緑の風に食滞しそうな鯉のぼり

温室がこよみと別な花咲かせ

山椒の新芽を待って摘み取られ

春雨に桜の色香盗まれる

鯉呼べば水に五重の塔ゆれる

平安神宮だらりの帯に似た桜

新緑に酔い酒に酔いバスに酔い

一坪へ種それぞれに咲き分ける

波の音島の哀話を話しかけ

バトンタッチして帰える夜道の星きれい

ブランコに合わせて揺れるうろこ雲

情熱のありったけ夕日空を染め

伝説の不思議へいつしか耳を貸し

星の私語耳をすませば聞こえそう

丹精の垣根に四季を着せ替える

茄子畑かぼちゃの蔓に割り込まれ

長谷の観音牡丹のついでに拝まれる

雑草にかくれて野菊そっと咲き

赤とんぼとまって野菊手折られず

五十鈴川陽はかすかなり鮎の群れ

夕やけへ子に追われてる赤トンボ

拾円の豆では足らぬ鳩が寄り

身に合わぬゆかたも旅のおもしろさ

見てあかぬ滝に体温奪われる

籐椅子のそこまで秋がしのびより

きりぎりす放してやれと秋の風

足音へ稍々間をおいて又すだき

早すぎる秋へ木の葉の正直な

すすきの穂こよみ通りに顔を出し

おぼろ月夜光源氏が出て来そう

夕映えに案山子一そう力んでる

秋風へ身振り豊かに舞う尾花

秋風が野点の袖をふくらませ

干し柿のあとへ玉ねぎ吊るひさし

今雲にかくれる月へ酌ぎこぼし

樽取ればこおろぎうろたえるうろたえる

冬近く仙人めいたすすきの穂

箒の先きをからかうような冬の風

湯どうふをゆっくり待つも京の味

珍らしい雪へ夜更けの窓をあけ

霜月の雨はもみじの紅に染み

# 両隣り

押し詰り植木の土もひからびる

雪や雪やと云う間に止んだ春の雪

両隣りハラハラさしてビルが建ち

すばしこい猫がお先きに試食する

謎かけてみんな云わせる聞き上手

一本槍自分の殻に閉じこもり

工事中大きく揺れるマスコット

膝の出たズボンで使丁親しまれ

生け花展一輪ひそと師匠の名

出前持ち今日の鉢巻き菖蒲で来

初出社平には平の抱負あり

ハイテイーン空想だけはたくましい

タイミングよい口出しが座を沸かし

天王寺亀もあきれている人出

よく光るダイヤの値札あっち向き

片腕で育てて見せます仏間の灯

パトカーへ寝まきの近所揃うたり

倦怠期其の都度変るお茶の味

社の訓示あっさりしてて行きとどき

なみなみと酌がれ口から出むかえる

郵便受けはち切れそうな留守つづく

千鳥足折箱の中味は隅へ寄り

灰皿があるのに畳焦がしてた

もりもりと泡立つとこをきゅっと飲み

早や来年の暦かと気ぜわしく

失礼ですがお齢はと聞きたがり

仏には盆のお経が短かすぎ

生け花の根締めにも似た一生か

参道にかかってガムも吐き出され

事故あってそんな気もした勘をくり

宣伝はお鍋の一部だけみがき

消防車遠くに消えて又眠り

初釜のゲストになって嫁さがし

留守を幸いセメダインで接いでおき

電化して餅焼くだけの炭を買い

糸こんにゃくふるえて袋につめられる

売れっ子の過去を知ってる眼に出会い

はりこの虎首をふりふり笹に添い

手土産と思えば先夜貸した下駄

デマ飛んでそれからデマでない二人

仏にも鬼にもなると云いよられ

黙否権パントマイムに似たドラマ

住所録古い番地のままとどき

定かに見えぬ古表札へ来る便り

郵便受け朝刊独り占めている

吸殻の数ばかり増えらちあかず

灰皿へ蓋がほしいな扇風機

パサリ新聞カタコト牛乳朝の音

雨つづきもて余ましてる猫の砂

低きにつく水はまことの心行く

足音のかたさへぞっと首すくめ

湯の宿で逢うてはまずい人に逢い

蒸発の謎が妻にもまだ解けず

亡き妻に似た人ならと折れてくる

鍋墨のついてる顔でよう動き

大声で話し野心のない男

一徹の親によく似た子が育ち

目標があって浪人してますの

羅針盤宿命のとこで止まってる

三十五度客もご免とみんな脱ぐ

バカンスのプランへ若さはち切れる

晩婚の主人が主人がを連発す

妾宅へ二次会抜けた足で来る

すべり込み門衛だまって時計見る

鉄骨の火花散らしてつながれる

時代劇大判小判山と積み

お謡いの序の口お経かと思い

海老おどる声で出前の寿司とどく

けむいのをまいて二次会弾むこと

序の口で妓一さし先きに舞い

飽きもせずへそくるだけの趣味に生き

浴衣会師匠の趣味で染め上がり

郷愁の空へ大きく吐息つき

足音で反発してる無口の娘

金槌を捨てて喰わえた指の色

物言いが出る程今のよい勝負

小姑の強気両親居るあいだ

聖書持つ乙女の服は地味な色

姑の早起き嫁の里へ知れ

どこで傘忘れて来たかはしご酒

エラーしたお蔭で出来たど根性

フイナーレ膳をまたいで輪にはいり

リーダーの不覚なだれを予期してず

坂道にかかりぞうりと杖の店

玄人がちよっとさわればすぐ直り

逢い引きへ鈴を落として猫戻り

昭和四十六年十月一日 印刷
昭和四十六年十月十日 発行
（第六十九回誕生日）

**句集「ねっくれす」** 非売品

大阪市天王寺区空堀町八―二
著作兼
発行人 西出一栄
電話 大阪 七六二一―四四〇八

大阪市南区鰻谷仲之町二〇
発行所 川柳塔社
電話 大阪 二七一―三九八五
振替口座 大阪・三三三六八番

八尾市北亀井町二丁目五―十三
印刷所 三和高速印刷
電話〇七二九（九二）〇二〇六